

始まりはドラマのように

始まりはドラマのように

君と手をつないで月明かりの森を歩きたい

米寿の祖母が老人ホームに入ったら

君と一緒に新居をそこに構えたい

僕が歩いた月明かりの森の近くの団地の二階

僕はだれ？

ただのおじさん？

夢先案内人？

いやだわ、そんなこと言わないで

若者は幻を見、老人は夢を見る

ふたりして幻を見て夢を描くこのふたり

さぞや滑稽なことだろうさ

さあさ皆さん寄つといで今日はバナナのたたき売り

もつてけドロボー

本日は恋愛ドラマの大安売りだ

雨

ある夜のことだった

糸のような小雨が降っていた

僕は君に言った

「気にするな」

雨粒なんて蒸発しちゃうほど僕は君に逢いたかった

君なんてスリッパを履いて出てきてくれたんだぜ

コートの下はワンピースなのかブラウスなのかすら判らない

ロミオとジュリエットの衣装、あんなの嘘つきだね

僕は君を抱えたかった

君はそれをためらった

それは正解だった

傷口が治っていない君を不用意に抱きしめてしまったら出血が止まらない

僕の燃える手で君を抱きしめたなら全身やけどする

でも僕を探してくれたのは君、不思議なもんだね

葉月華蓮とあしながおじさん

僕らふたりはまだ夢の中

葉月華蓮とあしながおじさん

いつかは馬脚を現す時が来る

その時が来ても互いに愛し合っていることを祈ろうじゃないか

正直に告白する

今の僕の君に対するイメージは葉月華蓮

でも頭の中では分かっているんだ

修羅場をくぐってきた君がそんなにヤワじゃないことを

僕だっけっていつばしのペテン師さ

蜜のような詩を書いて君を惑わせる

寂しい心の中に割り込むフーテンの寅さんだ

上げ上げで行こう

自覚してさえいれば怖くなんかないさ

このときめき、わかっちゃいるけどやめられない

贈る言葉

人は悲しみが多いほど人には優しくできるのだから、と

長髪のおじさんが歌っている

ふと悲しみに振り返ったとき

僕は涙に目をにじませながらもしずくを落とすことができなかった

若いママと独身のおじさん

どっちが多く悲しみを経験したかなんて話はよそう

叶わない願い、報われない苦勞、死に別れる痛み、止まらない焦燥感

みんなみんな捨ててしまえ

どっちが多く多くの幸せを掴んだかなんて話もよそう

子宝の幸福、家庭の支え、良い友達、生きる希望

みんなみんなもう一度思い巡らそうじゃないか

愛してるって最近言わなくなったのは本当にあなたを愛し始めたから、と

格好いい奴らが歌っている

ねえ、君は僕にとって、どんなタバコよりもおいしい麻酔薬だよ

申し訳ないが知って欲しい

申し訳ないが僕の方が詩を書く才能は彼より上だ

だから彼には僕にない優れた才能があると思つてほしい

申し訳ないが彼のアクセサリーも二流だ

だから彼の存在自体を心に留めてワインの澱のように静かに沈殿させてほしい

痛いかもしれないが聴いて欲しい

彼は職業的には何の才能もなかった

自己表現としての詩とシルバーアクセサリー

オナニズムの極致の域を出なかつたんだということを

だから知って欲しい

彼の避けどころが最後まで君だったということ

歳の変わらない大きな子供に頼られていたんだということ

だから知って欲しい

君と彼とは共に懸命に疾走し続けた戦友同士だったということ

僕は彼の替わりじゃないけどここにいますよ

乖離

乖離していいんです

自分が傷つくダメージを抑えるために人は乖離するんです

脳の自己防衛なんです

自分で嫌がったりする必要なんかこれっぽっちもないんです

ひとつ例をあげましょう

身内が死んでも葬式のために人は一生懸命動けるんです

なぜだか分かりますか？

人間はひと時感情を殺すことができるからなんです

そのあとは思いっきり泣かなきゃいけません

泣くべき時に泣いたほうがいいんです

さもなければ乖離します

でも乖離してもいいんです

心にフィルターを掛けるだけのことです

はい、今日の授業はこれでおしまい、起立。

言葉の魔力

あながち悪くもない

と僕は思った

携帯電話よりも

こんな風に詩をプレゼントしようとするのを

ナットの婚約指輪をはめるドラマがあったけど

僕の父は自作の勾玉のような重いネックレスを母にプレゼントした

あはは、こりやおかしいわ

恋は盲目だね

僕は君にどんな証を贈ろうか

詩しかないなあ

あんまり君を拘束したくもないし

でも僕は言葉の魔力を知っている

君を鳥かごから解放し自由に動き回れるようにさせられるのは

世界で一人、僕だけしかない

君の魔力

君は多くの人を惹きつける

僕も虜になっている

自分で自分の魅力がわかるかい？

自分に与えられた魅力を知ることが大切なことだよ

あどけない可愛さ

隙だらけの心

放っておけない危うさ

ラベンダーの香りのするオーラ

優しい声

軋る悲鳴

朝の嘔吐

体調を崩しながら

僕に携帯を掛けてくる第一声を着信音にしたいくらいだ

「もしもし」

悲しみと平安

「Peace I leave with you」という合唱曲がある

ヨハネの福音書14章27節の言葉だ

僕が指揮をした唯一の曲は

先輩を悼む時にみんなで歌った

わたしは、あなたがたに平安を残します。

わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。

わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

この曲の入ったテープがどうしても見つからなかった

数日後、僕が部室のカセットデッキを開けた時、そのテープは残ったままだった

先輩が最期に聴いていた曲が僕の指揮をした唯一の曲だったということに気づいた

僕はおののいた

学生指揮者であり、誰よりも麻雀が強かった先輩

あの世に旅立つことが唯一の平安だったのかもしれない

平安の望月

望月はやがて二週間後には新月を迎える

月明かりの差さない漆黒の夜

多くの人はその闇に恐怖を抱き

君と僕は目をつむったかのような暗闇に憩う

少し癖のあるあなたの声 耳を傾け

深いやすらぎ酔いしれるあたしはカブトムシ

琥珀の弓張月 息切れすら覚える鼓動

生涯忘れることはないでしょう

鼻ぺちやな女の子が歌っている切なくも悲しいバラードに耳を傾けながら君を想う
亡くした者の痛み苦しみを想う

そして自分をも想う、死を覚悟していたからこそ彼は僕の戦友で在ったと

この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたたることもなしと思へば

天下泰平、藤原道長の有名な一首だ

望月は必ず欠けてまた望月に向けて新しい月を始める

人間だもの

人間だもの

と言われて安らぐ人は多い

でも僕は嫌いな言葉だ

そこにはあきらめがあるから

Noniにならなくてもいい

もどもど特別な Only one

この歌詞も僕は嫌いだ

オリジナリティーという見えない壁を作ってしまうから

十字架を掲げてこう言おう

ここに義あり

ここに幸あり、と

人間不信に陥りやすい傷つきやすい魂の君だからこそ

あきらめず自分の殻に閉じこもることもなく

本当に自由な人間になれることを伝えたいからだ

神話

惑星たちが消滅したことを伝えたくて

ヴィーナスは神々たちと協力して

美しさを失って意気消沈していた

ナルキッソスを見つけ出した

ナルキッソスはヴィーナスに顔を向けた

美しいヴィーナスを

ナルキッソスはイカロスに変身して

天高くヴィーナスのもとへと羽ばたいていった

ヴィーナスがナルキッソスを見つけ出したのに

ヴィーナスに一目惚れてしまったナルキッソス

ナルキッソスはゼウスに助けを求めた

ゼウスは一部始終をご覧になっておられた

これからのことも

神のみぞ知るところだ

ドンと構えよう

僕は追い求めたい

互いに矯正し合うことよりも

すべてを許し合えることを

すべてに感謝することを

墜ちるなら墜ちるがいい

半殺しにするなら半殺しにするがいい

あしらいたいようにあしらうがいい

この病を持った人はみな一旦死んだも同然なのだから

人間誰しも半殺しにあつた急病人

ベッドを日向に変えたらよくなると信じたり

暖炉のそばに運ばれば治ると信じたりする

そんな夢よりも大きな夢を見よう

幻を見続けよう

それが現実になることを信じて

不健康かなあ

眠たくなる陽気の午後

目が冴えてしまう夜半

食べたくない朝食、

急におなかが減ってしまいう夜

風邪ひくと吸いたくなるタバコ

時間がない時ほど吸いたくなるタバコ

寝不足の朝においしいタバコ

外で吸うとおいしいタバコ

食べないでいると上がってくるテンション

買い物をするを訪れる幸福感

これって中毒？

ねえ、教えてよ

これって悪いことなの？

別に長生きはしたくもないのですが

君の支え

君の一挙手一投足が僕の喜びと悲しみと不安

こんな僕じゃ壊れてしまっ

壊れるのは君ではなくて僕のせい

難しいのはそれほど感じやすくないと詩が書けないということだ

強くなろう

仕事に戻れなくなっ

希望を捨てずに生きて行こう

僕は十分に愛されているのだから

桜舞散る中を僕は歩いた

新緑の若葉の様に生きて行こう

決してめげないことが僕の信条

打ちのめされた心の中に

君は居るだけで僕を元気にしてくれている

サンクス

時間よとまれ

もつとゆっくりとした時間を歩めばいいのに
何で一秒ごとに君の声が聞きたくなるんだろう
常に夢見ているから
いつもそばにいたいから

一番悲しい人生って何だと思う？

忘れられることだよ

一番幸福な人生って何だと思う

神と人ともに愛されることだよ

僕に愛されることなんてくだらないことだ

でもお願い

僕にも夢を見させてもらえるかな

ビールを少し飲んで

ほんのりとした君の素顔が可愛い

「ねえ、ジャコさん」って語りかける雰囲気が出ているね

裏表のない君

僕は裏表のない君が好きだ

心臓に直接触れられるほど無防備な心

厚顔無恥の奴らが世間を牛耳っているこの時代

君のような存在はまさにエンジェルだ

「密」って名付けたの正解だったね

密会、秘密、蜜の味

それに加えてふたりとも精密で壊れやすい

アルプスの少女ハイジのブランコのように心が揺れる

舞い落ちる桜にたとえて二首

桜浮く渡しの風に若柳揺れる枝々我をいざなう

葉桜や淡い花びら萌黄の葉見上げてごらん幹と空

未来に希望を託して二首

この詩集最後の詩集にしたくない死ぬまで僕は書き続けたい

君になぜお熱なのかと問われてもどこが好きやか云わすな阿呆

恥ずかしい

この詩集はどう考えてもこっぴどずかしい

でも本当にこっぴどずかしいのはこれを書いている自分

何年かしたら恥ずかしすぎて読めないかもしれない

でも僕は互いにこの冊子を持っておきたいんだ

夢見るふたりのメリーゴーラウンド

夜が更けて乗っているのはふたりだけ

僕は木馬から飛び降りて駆け込んだ

君の乗っている木の白馬の尻に

お互い向かい合って話せない状況

君は後ろ手に僕の手を握った

僕は君の緊張した冷たくしつとりとしたその小さな手の感覚が忘れられない

ああ、似ているようで互いに違うんだなと思った

僕は車窓に流れる景色とか知らない街をガシガシ歩くと落ち着くん

お互い欠けを補い合えればよいのだが・・・